

## 梶井基次郎「泥濘」論

— 成立過程と草稿からの再考 —

はじめに

大正十四年七月、『青空』第五号に発表された「泥濘」は、梶井の作品史において「過渡的な性格」<sup>1)</sup>を持つ作品として位置づけられることが多い。「泥濘」「路上」「椽の花」という連続する作品群中に置いた際にも、「書くことの追求」のために書かれた作品群であった<sup>2)</sup>とされ、「過古」「雪後」での作品構成の方法化へと向かつて続いていく<sup>3)</sup>。「試行」と位置づけられている。<sup>4)</sup>

また作品自体への評価としても、「作品の構造としては「檸檬」と同質のものを持つ「泥濘」が、部分的にはすぐれた表現を示しながら、作品自体としては「檸檬」ほどのつよい印象を残さない<sup>5)</sup>」といったものや、「末尾での月の影に憑依するドッペルゲンゲル的エピソードは梶井の資質論にとつて好個の材料ではあつても、作中作家である（自分）を再度書くことに向かわせるためのものとしては全く弱い<sup>6)</sup>と言わない<sup>7)</sup>」といった否定的な評価が目立つのである。

しかし、いずれにせよ諸家が「泥濘」を梶井の作品史におけるターニングポイントを示している作であることを指摘しているのは興味深い。「泥濘」は、のちの梶井基次郎の文学の根幹の一つであるドッペ

## 二 宮 智 之

ルゲンゲルを醸成し、創出するエレメントとしての位相を確実に占めているのは、まぎれもない事実なのである。」との桐山金吾氏の指摘には首肯できる。しかし、桐山氏も「泥濘」に描かれたドッペルゲンゲルの基本構造の観点から見た場合、「泥濘」は「緊張感のうすれた作品」と評価している。<sup>8)</sup>

これら諸家の論を概観すると、「泥濘」の評価を否定的にしている一因として、それが「檸檬」との比較の上でなされている評価だということがあるように思われる。「檸檬」との比較は、作品構造の類似という点からも避けられない観点ではある。しかし、「泥濘」自体の読解と評価を行う際、他作品を基準とする観点には、ある種の弊害もあるのではないだろうか。

本論では、まず「泥濘」の成立、読解を再検討し、また「檸檬」との距離を検討しつつ、その位置と意味について考察したい。

### 一 「泥濘」の成立過程

既に指摘があるように「泥濘」には、それが書かれたと推定される大正十四年六月までの梶井の実生活に材を得たと思われる部分が多く

見られる。濱川勝彦氏は作品と実体験との関係について、「具体的には、大正十四年一月三十日の大雪のこと、同日附と同年二月十六日附の近藤直人宛の書簡に書かれた事柄が、作品のアウト・ラインとなっている。作品中の銀座のカフェ・ライオンでのこと(「二」)は、両書簡にはなく、日記第六帖の同年五月五日の項に詳しい記述があり、それが基になっているようであるが、カフェ・ライオンへは足繁く通ったようであるから、五月五日の見聞のみによつたとは言えない。日記・第七帖の大正十四年分のほとんどを使つて、この「泥濘」の草稿が書かれており、それによると作品のプロットは草稿から完成稿への過程で大きな差異はない。」と指摘している。<sup>6)</sup>

幾つかの例を確認しておく、まず大正十四年一月三十日近藤直人宛書簡には、「今日は大雪です 寒さを冒して本郷へ来ました、散髪屋の釜がわれてゐて頭をろくに洗つてくれなかつたので石鹸の泡をつけてあるいてゐます」とあり、作品中「二」での出来事、「散髪屋は釜を壊してゐた。自分が洗つて呉れと云つたので石鹸で洗つておきながら濡れた手拭で拭くだけのことしかししない。」に対応している。

同様に二月十六日の近藤直人宛書簡中に記された出来事も作品中の表現に対応している。書簡中には次のようにある。

この間から二週間坐り続けて書いてゐたものが、どうやら失敗でして、何がなやら薩張訳がわからなくなりました。

一種の神経衰弱ではないかと思ひます、頭が悪くなつて、算術の容易いのも出来ない有様です《中略》

此の間大雪の日、(お葉書をだしたでせう)金が来て、平常入用のものを買はうと、本郷を矢鱈に歩き、銀座を歩きつくづく自分の吝嗇漢なの

にあきれました、吝嗇だけならいゝんですが、或一軒の本屋で改造の本を買はうとする、二十銭、こりや高い、と次の本屋まで歩きます。その辺でさつきの改造がまた欲しくなり、引きかへすとまた欲しくなくなります《中略》

御茶の水で定期を買つて有楽町までゆく間、定期は毎日いくら位の割になるものか胸算用したのですがわかりません、それも、もう数字が目の前で落ちついて呉れないのです。やつと判つたら、毎日学校へ行くとは定めて、切符を買ふのと同じことだ、といふ答で。此方は毎日学校といふ訳ではないので悲観しました。そしたらそれもちがつてゐたのです。銀座でパンを買ふつもりをしてゐましたら、其の家は閉めてゐました、立派な珈琲店にフランスパンが並んでゐたので入つて半斤買ひました、八銭です、隣では三圓の菓子を買つてゐる、十銭で二銭の剰余銭、少しでも無礼な顔附をしたらどなりつけてやると思つて睨んでゐました。

この書簡に対応する作中での出来事、あるいは表現としては、まず「一」での冒頭部、「それより前、自分はかなり根をつめて書いたものを失敗に終らしてゐた。失敗は兎に角として、その失敗の仕方の変に病的だつたことがその後の生活にまでよくない影響を与えていた。」がそれにあたる。以下、「二」での「古本屋を歩く。買ひ度いものがあつても金に不自由してゐた自分は妙に吝嗇になつてゐて買ひ切れなかつた。」の部分や「お茶の水では定期を買つた。これから毎日学校へ出るとして一日往復幾何になるか電車のなかで暗算をする。」「八銭のパン一つ買つて十銭で釣銭を取つたりなどしてしきりになにかに反抗の気を見せつけてゐた。」などの部分が、梶井の実生活と対応している。

また、同年の五月五日の日記には、「棚の上はとびとびにグラス。中はバグダツトの祭り。整列したアラビア兵。下は氷細工の様にコッ

プやグラスがならんでゐる。コクテールを作るボーイ、終ひにはコクテールに振られてゐる様だ。」とあり、作中「二」の結末部、ライオンでの食事の表現に対応している。

以上が梶井の実生活と強く結びつきがあると指摘されている箇所であり、作中の表現にほぼそのまま生かされているといつてもよい。「泥濘」の作品構成を振り返れば、これらは「二」に描かれた、街での主人公奎吉の行動の描写のほとんどを占めている。「泥濘」の私小説的な性格が指摘される所以でもあろう。

この様な「泥濘」と作者梶井の実生活との関係について西尾玲氏は、書簡、日記等の資料を中心に、いわば私小説的に「泥濘」を読む試みと、客観小説的に読む試みの両方を行い考察している。結果、「いくつかの心の転換を描き、最後にその最大の転換を持ってきて、変な気分から完全に脱して一日を、そしてこの数日間の暗い気持を終わらせる主人公の姿を描いていると読めるのである。そしてその心の良い方への転換のキートンとして、『視る』ことを一貫して使っていることがわかる。」とし、梶井の作品を私小説として切り捨てることへの批判と、私小説として読むことで生じる作品の破綻と、「泥濘」の具え持つ作品構造について指摘している。確かに「泥濘」での視線、テキスト内の「自分」の視る行為は特徴的でもある。先行研究でしばしば指摘される「視ること」と「気持の転換」の結びつきは「泥濘」という作品中において、確かに重要に思われる。つまり、そこには「視ること、それはもうなにかなのだ」という「ある心の風景」(大正十五年)との関連が連想されるし、既にその指摘もある。

ただ、ここでまず検討したいのは、「泥濘」の主旋律ともいえる「自

分」の「気持の転換」にまつわる行為が、どこから生じているのか、どのようなものなのか、ということである。しかも、それを探るためには、いましばらく書簡、日記といった資料が有用ではないか、と思われる。

## 二 テキストとしての書簡・日記

既に見たように先行研究においては、「泥濘」、そして梶井作品を私小説として読むこと、また書簡、日記などの実生活をうかがわせる資料から読むことが、読みの幅を狭めるものとして危惧、または批判されている。しかし文字記号で記されたものをテキストとするという考え方をつきつめれば、資料とされる書簡、日記もまた、《書かれたもの》としてあるものである。言い換えれば《作者の実体験》を裏付ける《資料》もまた文字という記号で記されたテキストであるということになる。むしろ、テキストが他の諸テキストとのあらゆる関係性の中にあつて成立しているものであるならば、同じ人物によつて書かれたものであると認定されているテキストの相互関係ほど強く、必然性のあるものはない、ということになる。

以上の物言いは、作家・作品論的な読解の手続きをテキスト論的に敷衍しようとする折衷案に過ぎないであろうが、以下の考察では、「泥濘」執筆時期に書かれた書簡・日記等を検討し、「泥濘」と隣接する資料をテキストとして読解し、「泥濘」の本文テキストに結びついていくテキストの関連の様相を明らかにするという形で進めたい。

「泥濘」においては、一人称の語り手となる「自分」の「気持」が

重要であることは先に述べた通りである。では、その「気持」は作者の実体験として書かれたテキストの中には如何に記されているのかを検討したい。考察の対象としては、「泥濘」との関連が明らかに見られる大正十四年一月三十日の書簡から、「泥濘」が既に書き上げられたとされる六月十六日以前のものとする。

まず、「泥濘」での主人公、「自分」（奎吉）の市街散策の描写には、梶井の実体験、大正十四年一月三十日と五月五日の出来事が生かされているのは前述の通りである。しかし、「泥濘」作中に描かれた、八銭のフランスパンを買う際の「気分」には少し異様な雰囲気がある。作中の次の部分である。

自分は変に不愉快に思った。疲れ切つてもゐた。一つには今日の失敗り方が余りひど過ぎたので、自分は反抗的にもなつてしまつてゐた。八銭のパン一つ買つて十銭で釣銭を取つたりなどしてしきりになにかに反抗の気を見せつけてゐた。聞いたものがなかつたりすると妙に殺氣立つた。

ここで「自分」の感じる「不愉快」、「反抗的」な気分と、「殺氣立つた」ような気分について、作中の表現だけで読解することは困難であろうし、作中で十分に語られているとも言ひ難い。だが、「変に」「妙に」とぼかされた感情について、前掲二月十六日の書簡は、その間の心理状態を克明に示してはいないだろうか。つまり作品内に記されなかった「隣では三圓の菓子を買つてゐる」こと、それに引き替え、「自分」の買っているパンは「八銭」であるということである。ここに描かれた対比は金額の差からいっても、いかにも惨めなものであり、な

により周囲からそう見られること、店員にそう思われることへの腹立たしさや、羞恥心が記されているのではないだろうか。

さらに「殺氣」や「今日の失敗り方」についても、「自分」は何に對してそこまでの感情を抱いているのだろうか、特に「失敗り」と表現がある割に、作中のこの時点で「自分」は大した失敗をしてはいないのではないだろうか。三人が「迂つた」雪道にも、「自分」は滑つた様子はないし、散髪屋での石鹸の件も店の落ち度であり、不愉快な出来事ではあるが「自分」の失敗ではない。古本屋をうるついたり、電車の定期券を買つたことで余計な出費をしたのは失敗かもしれないが、そもそも一日の出来事全てを指すような「今日の失敗り方」という言葉がなぜ用いられるのだろうか。ここで二月十六日の近藤直人宛書簡に再度目を向けてみる。

有楽町の乗場へ帰つてもなんだか腹が立つてプラントフォームから小便をしてやりました。おこりに来たら喧嘩してやると思つたのです、おこりに来ませんでした、そこを見るとガードなんです、下は市電が通つたり人が通つたりしてゐます、少々閉口しましたがおこつてゐるものだからさま見るといふ氣持になり少し胸がすきました、帰つて見ると買つて来たもの買つて来たもの、皆失敗です、足袋は文のあはないあはせ足袋を買つて来てゐますし、茶は籬入かと思つたら、箱へ入つて錫で包んであるだけです、道々吝嗇をしながら、何倍も時間をかけて買つたもの故、実に堪らなかつたです。

この書簡には、誰彼構わず喧嘩を売ろうとする、なぜやりで退廃的な気分と、買つてきた品物が悉く「失敗」つた「堪らな」さが記されており、それぞれ「殺氣」と「今日の失敗り方」という表現に對応す

るだろう。特に、一日かけた買い物品々に費やした時間が無為となつた状態が「実に堪らなかつたです」という言葉に表われている。作中での時間からいえば、「買って来たもの」の失敗に気づくのは、この時点ではなく「自分」が家に帰ってからでなければならぬが、全てが済んだ時点にいる「泥濘」の書き手たる梶井は、「今日の失敗の方」を決定的にしている出来事である、それらの買い物についてのことをこの時点で書き込んでしまっている、と読める。

そして、特に注意しておきたいのは、この日の書簡に書かれた出来事が「泥濘」の基になっているとされながらも、作中に記される「不愉快」「不機嫌」「不活發」という言葉が全く見られず、それどころか末尾には「此頃素晴らしい情熱です、子供に帰つた気がします。御安心下さい」と記されているということである。

続けて三月十三日から五月四日までの書簡について見てみたい。既に指摘があるが、三月十八日の宇賀康宛書簡に「二十日まで原稿」、二十三日の宇賀宛書簡にも「今原稿で弱つてゐる。」とある。しかし梶井は結果的にこの時『青空』に作品を掲載することができなかった。注目したいのは、四月二十一日近藤直人宛書簡である。

此の間は私の神経が弱かつたため元氣にお話も出来ず、劉生の画をあんなに長く見てゐながら、見る前と見た後と、私の氣持が意識出来る程も変わらなかつたやうな合合で、大さう申し訳ないやうな氣がしました。

ここで目を引くのは、まず、「私の氣持」を「劉生の画」を見ることによつて、轉換しようとする行為が見られることである。また、春

の陽氣を厭うような「氣候がいけない」という言葉も見られる。また、この後四月二十九日の近藤宛書簡にも見られ、「私は毎日疲弊して随分不愉快です」とある。この時期を境に、「不愉快」という言葉が多く記される様になる。まず五月五日の日記には、この時『青空』同人であつた千賀太郎が梶井や周囲の人間から借りた金を返さないままに、同人を抜けるという事態に際し、「意志薄弱ならんも同情が追ひついてゆけない、それから先は憎まねばならぬ、自分はこれを憎み不愉快になつた。」とある。次の日、六日にも「此日倦怠甚だし」とあり、虫の声に対して「こんな耳鳴をしたらさぞこれ位不愉快だらうと思つて程不愉快」と記している。この頃の日記の記述には、昼頃まで睡眠をとり、倦怠感や罪悪感を感じている姿が多々記されている。これは「昼頃まで夢をたくさん見ながら寝てゐる自分には、見た夢と現実とが時どき分明しなくなる、悪く疲れた午後の中があつた。」との作中での表現と対応する。「泥濘」が執筆中であつたであろう五月二十四日の日記にも、「夢と現実とがこんな風に重なつては不愉快である。現実であつた疑ひが今でもしてゐる。」ともある。また、前後するが、五月五日の日記には「外村来る、腫面の写真など見る。」の記述があり、作中の「醜惡な伎樂の腫れ面」を思わせるとの指摘もある。作中の細かい表現についても、かなりの点で「泥濘」に対応する表現を認めることが出来る。

これまでの考察をひとまず集約しておくとなれば、次のようになる。まず「泥濘」での「自分」の市街散策の描写には、梶井の実体験、大正十四年一月三十日と五月五日の出来事が生かされていることは間違いない。しかし一人称で描かれる「自分」の「不愉快」や、「氣

持の転換」といった「泥濘」の作品構造の核となる部分、感情の変遷は、大正十四年春、特に四月二十一日以降の梶井の心理状態を色濃く反映しているのではないか、ということである。また作品中の「自分」の「気分」に関わる細かい描写についても同様である。加えて「泥濘」の作品構造の主要な要素である「気持の転換」についても、興味深い記述が見られるように思われる。続けて考察する。

五月十二日の日記には、「歩いてゐたら 麻布へゆくことに心極る、すると若葉が急に詰らなく思へて来る、しかたがないので歩いてゐると、また気 落付いて来る、やはり美しい樹木の力など えらいものと思ふ、」とあり、植物の美しさによつて気持ちを落ち着ける、という記述がある。この部分は、「泥濘」作中の「風に吹かれてゐる草などを見つめてゐるうちに、何時か自分の裡にも丁度その草の葉のやうに揺れてゐるもののあるのを感じる。それは定かなものではなかつた。かすかな気配ではあつたが、しかし不思議にも秋風に吹かれてさわさわ揺れてゐる草自身の感覚といふやうなものを感じるのであつた。酔はされたやうな気持で、そのあとはいつとも心が清すがしいものに変つてゐた。」の部分に対応していよう。この日記と、五月十九日の「それから麻布へゆく。市役所前から乗った女の人 奥さんならん、いゝにほひをさせて、とてもいゝ匂ひ。美しい人！ 自分は気が清々して、幸福になつた。」という記述などからは、美しいものに接することで「気持の転換」が行われていることが読みとれるといつていいだろう。

しかし、五月十二日以降の書簡・日記には、「不愉快」の記述が頻出するようになり、その「気持の転換」が容易になされない状況がう

かがえるようになる。まず、五月十二日の日記には、

淀野へゆく、外村ゐないとのこと、  
「外村おこつてたぞ 狸や狸やつて」むかむかと不愉快になる、顔に出  
てくる。

自分は出来るだけのことをやつた、然し出来なかつたのだ。

とある。この時期の経緯として、梶井は大正十四年一月、『青空』創刊号に「檸檬」、同年二月の二号に「城のある町にて」を掲載しているが、三月発行の第三号、六月発行の第四号には作品を掲載することができなかつたということが挙げられる。雑誌に掲載することができない事について、梶井と同人との軋轢だらうことがうかがえる。また翌十三日にも、「中谷の置手紙を見て少しまた不愉快になつてゐた」とあり、また「浅沼が『梶井は自分に云はんならんことを人に云ふから 一緒に行くのは御免』、淀野は『精進せい〜と云ふから 苦手だ』とのこと、若い人達に不人望なる如し、聴いてゐるうちひとりで不愉快になる」とある。また、同人との軋轢に対する梶井の拘泥の様子は二十二日頃からの日記などにもうかがえる。二十二日の日記は冒頭に「此の頃、書くもの手紙、日誌共に誤字及脱字多し。神経疲労のためならん」とあり、「泥濘」での「気分」を髣髴とさせる。続けて「○ 帽子のこと」と題された記述がある。

○ 帽子のこと。

中谷及外村席にすわる。

「またおこれん様になつた」といふ様なことを云つて外村微笑む。

それから種んな話あった。《中略》

これから少し経ってからもしれない。淀野が

「怒られると思ふ時分にもって来て……」といふ様なことを云った。もう少し長い言葉を使つたらし。言葉が終らない先に自分はあれを持ってゆく日のこうでいを思ひ出した。

持つてゆかうか ゆかうまいか、今持つて「来」行つたら「少」また狸的な見方をしられるが、一然しあちらは催促もしてゐたし、もつて行つてやらう。狸といふこと自分では信用してゐないんだから。俺を狸と見ることに對する些少の軽蔑。及、狸と見られ それによつてなにか狸意識を養成しられることを予防するため。またみすみす狸なことをしてやつて、自分が狸といはれることに參つてゐないぞ。いつか狸でない「とき」(こと)がわかるにちがいない。その時「自分が」(彼は)狸だと云はれてゐて びくともせず狗(拘)泥もせずに 帽子を持つて行つた「ぞ」、一といふ様なことを思つて 持つて行つた。

止そうかなあ など思つて「見たり」捨て、見たり、新聞紙にくるむだのを丸善の紙に包みかへたり。

一 自分は今もその言葉を軽くそらさうと思つた。顔が少し歪んだ。少し位歪んでゐても 直せると思つた。直しかけたらなほ少し歪んだ。少し堪えてゐた。自分は今も駄目だと思つて顔を歪ませた。するとぐんぐん歪んで行つた。それは益々増した。

「あゝ不愉快、う……ん」頬がけいれんしてゐる。自分の前の中谷、横の外村 向ひの千賀など ひつそりしてしまつた。自分は危くその変な悔(悔)辱のために泣きそうになつた。宇賀のことを思ひ出し「て」た。そして段々顔の歪みがとれて行つた。

「狸的」という言葉は、前掲の五月十二日の日記にある記述に對応している。梶井たる「自分」が、仲間内で信用されずに、「狸」呼ばわりされることに對してのストレスと、それらをはね除けようとする「こうでい」が記されている。ただ、ここでの「不愉快」は無難に「転

換」されることは出来なかつた。「中谷」「外村」「千賀」のいる前で、

「自分」は感情の動きを抑えることができずに爆発させてしまつてゐる。そして、ここに記された「自分」の感情の暴発を、「自分」は何とか「転換」へと導こうとする。同日の続きには次のようにある。

「非常に沈うつだつたね」と中谷。

「變てこになつてしまふてな、梶井に不愉快さしてから……泣いて謝り度い様な……」

自分の気持がぐぐと引かれた。

なんだか感謝と云つた様な、彼の純粹さをほめたい様な。《中略》

身がしまつてものが書ける晩になつた様な気がした。あのときはちがふ。

と云つた、その時が来た様に思つた。変な昂奮、相反した二つを持てる。

へロイズム。へロイズムを確かに感じてゐた。あとで「なんにもなかつたのだ」と云つたにつき。

堪らへてあと 反對に非常に清々しくなつた。この原因が変なへロイズムらし。また、あれが自分の狸的攻撃にたいする自分の気持の反映で、その反映の 変にリアルな表現であつたことを快く思ふ、また、淀野の様な人に云はれ、淀野には充分な好意があり「外村に」然も麻布影口の反映であることから、外村自身に云はれたよりも、不快「のあとの清」を不快のまゝ「にしておく」(へに出し、席)を蹴つて立つたり、言葉を荒立てたりする気持もなかつた故、

結局、友人が反省する言葉を契機に、「自分」はそれまでの不愉快が洗い流されたように、「感謝」を感じ、「ものを書」こうとし、「書ける」という気分になる。ここで「自分」にとつての、書くこととは、「不愉快」の原因となつてゐる「狸」という周囲からの評価、原稿を書くといつて書かない梶井という評価等を払拭することに繋がつてゐる。もちろん小説を書くことを自身の存在証明としてゐる梶井の姿で

もあろう。翌日の二十三日の日記には、「前夜から一すいもせず。前夜は急にアブノルマルと思へる様な創作欲が湧いて、それにとりかゝつたが、(基次郎!)中途で止し、」という記述も見られ、その時のものが「泥濘」の草稿だろうと指摘されている。

この様に前掲五月二十二日の日記は、「泥濘」が書かれた時期において、「自分」の「気持の転換」という要素を持つ体験として、重要だろうと思われる。今少し、ここでの記述に目を向けよう。すると、まず「変な昂奮、相反した二つを持てる」とある。「泥濘」における「自分」の分裂のモチーフとの関連が感じられる箇所である。また「反対に清々しくなつた」の部分は、「自分」の「気持の転換」の実体験ともいべき記述であろう。しかし前掲に続く記述は次のようなものである。

その次また不愉快が来る

淀野のことで昂奮、

また不愉快になる、

淀野の云つたことの自分勝手な解釈。と思ひ、彼は彼自身のことですつになりにしならん。てなことで。

なにしろ、胸にたかまつて来る昂奮がずっと続いてゐる、ことの今でもその影響あり、

結局の所、「自分」の「反対に清々しくなつた」という気分は、何か「不愉快」を抑えつけようという欺瞞に過ぎないのである。そもそもそれは、自分の中の感情を「堪らえた」結果なのである。でなければ「反対に」という言葉も、そこに付随するはずがない。同様の事

は翌二十三日、続く二十四日にも見られる。まず二十三日には、

どうした訳か・多分徹夜の病的昂奮、外村にも中谷にも浅沼にも、いやすべての憎悪から超越した様な気持になる。晴々した気持、然し底に病的なものを感じつゝ。「外村のところ」然し前夜のことかまた頭に帰る。

と、負の感情からの「超越」を気取りながらも「前夜」の事、「不愉快」から気分を転換しようと乱れる感情の動きが思い出される。ただ翌日二十四日には、「今日 外村、浅沼 には何の憎悪をも感じてゐなかつた、中谷に悪い妄想が起る、」とあり、徐々に感情の高ぶりが治まりつつある様子がうかがえる。

以上、「泥濘」が執筆された時期における、作者梶井についての書簡・日記について検討した。熊木哲氏は、この時期の友人達との軋轢について、「それまで堪えていた感情の爆発とそれからの回復が、梶井基次郎の心情に好影響を与え、創作意欲を湧かせることになつたのである。(友達に裏切られてゐるような妄想が不意に頭を擡げる)とは「泥濘」(一一)の一節であつた。友人達に対する感情の齟齬といつたことが、梶井の心を重く塞いでいたのではなからうか。(すべの憎悪から超越したような気持)と記すことの出来た時、「泥濘」は成稿への一步を踏み出したのであろう。」と述べている。しかし、梶井の実生活をうかがわせるテキストにおいて、「自分」の「気持の転換」は本当に図られたのだからか。「自分」あるいは梶井が、自分の気分が転換したという気になつても、一方でその反作用が起るかの

ように、負の感情が起つてしまう。それが、前掲の梶井の資料から読むべき「気分」の様相ではないだろうか。もちろん、実生活で果たせなかつた「転換」を作品中の「自分」において果たさせたのだ、という見方も成り立つだろう。では「泥濘」という作品が何を主題とし、如何に表現しようとしているか、その構造はどのようなものか、以下さらに考察をすすめたい。

### 三 「泥濘」草稿からの視点 生成過程としての草稿

さて「泥濘」の作品自体を考察する際に、大正十四年五月に「泥濘」の草稿として書かれたものについて、考察する必要があると思われる。先行研究ではこの草稿について、存在は指摘されてもあまり重要視はされてこなかつた感がある。渥見秀夫氏が草稿について、その推敲過程などに注目し、「草稿の途中段階で明記されかかつた自己分裂の直接的表明を回避することができたレベルで、作品は完成を迎えることになつた。」と指摘しているが、<sup>(10)</sup>管見の限り、草稿について最も踏み込んで言及している数少ない論であると思われる。

確かに、前掲の濱川氏も指摘する様に「作品のプロットは草稿から完成稿への過程で大きな差異はない」かもしれない。例えば、「檸檬」と習作「瀬山の話」との関係と対比させた場合には、「泥濘」の草稿と作品の間には「大きな差異はない」と見るべきであろう。

しかし、草稿とはそもそものようなものだろうか。松澤和宏氏は草稿について、「生成論では、そのような観点から最終稿<sup>テキスト</sup>に先立つて書かれた資料を一括して前テクスト *avant-texte* と呼び、最終稿へ

至るプロセスのなかに位置づけ、読解可能な対象として構築している。」とされている。<sup>(11)</sup>

ここで考察の対象とする「泥濘」の草稿は、印刷媒体を経たものであり、厳密な意味で生成論の方法が適用されるべき対象ではないかもしれない。しかし、「言葉の生成の劇」(前掲、松澤氏)に触れるという方向性において草稿を読むという試みを、この「泥濘」の草稿について行つてみたいと思う。以下「泥濘」の草稿について、作品たる定稿へと至る、主題と構成が生まれる過程を見るところで考察したい。

現存する草稿は、梶井の日記等から推測するに、大正十四年五月二十二日以降から書かれたものであると思われる。この草稿を「泥濘」本文から見た場合、確かに作品構成や、「自分」という視点人物兼主人公、そして「自分」の語る挿話、結末に至るまで、大きな差異は認められない。「定稿は第七帖の草稿を整理することで成立したと云えよう」とする指摘は、<sup>(12)</sup>首肯できる。しかし、草稿から定稿へという観点、その成立する過程を見た場合にはどうであろうか。特に定稿として成立した部分ではなく、成立しなかつた部分、削除された部分をも見ることで、「泥濘」における書き手の梶井の意図とその可能性、あるいは作品解釈にも新たな観点を見出せるように思われる。

まず冒頭の部分において、草稿では二度書き直されている部分が認められる。以下掲げる。(なお、全集での表記に従い、「」内の字句は抹消部分を翻刻した部分、( )内は欄外に書き入れられた字句、「」内は一度抹消された部分が、その部分を含んでさらに広い範囲で抹消された場合を示している。前掲の書簡、日記も同様。)

待ってゐた家からの為替が来たので 自分は「永らく引き籠つてゐた」久しぶりで「それを」本郷の方へ

待ってゐた為替が家から届いた「。」ので それを金に替え方々 久し振りで自分は本郷「の」へ出掛けることにした。「その前の日」二度目の雪【の】が

「その年に」「立春」

表現としては、定稿と比して大きな差はないが、「自分は出来るだけのことをやつた、然し出来なかつたのだ」という状態の梶井が、遂に書き出し、その冒頭に苦心した跡ともいえる。

続いて大きく削除、訂正している箇所として、本文の「書く方を放棄してから一週間余りにもなつていただろうか」以降の内容に合致する部分であろうと思われる。以下に掲げる。

それを書きつけやうとする瞬間に 変に憶ひ出せ（なく）なつて来たりした。「書き続けて来たことを読み返してみても」

「それまでのところを読み返して見【るのに】ても書いたときの自分が感ぜられる【。】度に訂正」

「それを書いたときの気持が」

「読み返しをする。書い」

「読みかへしをする。訂正する。また読みかへす。訂正する。そんなことをしてゆくうちに訂正も出来【なか】なくなつてゐた。書きはじめの気持【は】を忘れてゐるのに」

「読みかへしをする度に書きはじめの気持が」

読みかへしては訂正してゐたのが、それも出「来ない」来なくなつてしまつた。どう直せばいいのか、書きはじめの気持「はとつとくに自分」（そのもの）が（自分には）どうにも思ひ出せなくなつてゐたのである。

「なに、魅かれてこんなものを書いてゐたのだ」・直ぐにも自分はやめてしまふべき「であ」だつた（のだ）。然し自分はそんなになつてゐる「でも執念深くやめなかつた。「しまひには一行の」結果はよくなかつた。

ここでは、書いては読み返し、読み返しては書く内に混乱していく「自分」が、文章それ自体の混乱の中に表されているようにも感じられるし、「なに、魅かれてこんなものを書いてゐたのだ」という一文は、もはや作品内の「自分」の言葉というよりも、梶井自身の叫びのようにも思える。また続けて「自分」の「気力」が無くなり、「澱んだ沼の水の様に」止まり、その自分の気持ちは「悪夢に似たところのある」という描写について拘泥している。作中では続く部分に「水が腐つてゐる花瓶」の挿話を入れ「不活発」な気持ちについて、まとめ上げている、といった形になっている。

このように「自分」の「気持」について描く際、草稿において、多くの逡巡が見られ、書き手が如何にこのトピックを重視しているかがうかがえる。定稿で「自分の動かない気持は、然しそのままであつた。」と何気なく書かれてあると思われる箇所も草稿では、

自分の動かない気持は、然し、「そんなことで（は）決していつものコー  
スへ戻らざれな【く】かつた。」「それによつていゝ影響をうけなかつた。」  
そのままであつた。

と、二度の推敲を経て書かれている。これらの例からも、「泥濘」の作品構造として、「自分」の「気持」、特にその動きというものが重視されていることがうかがえるのである。

しかし、その「氣持」の描写が少ない部分の草稿は、ほぼ定稿と同じ構成となり、異同が見られるのは表現上の些少な変更、削除、などが多くなる。本屋での挿話についても、書き直しが多く見られるが、一旦書いた部分を、続けざまに推敲しているといった感がある。続く部分で定稿との大きな異同がある点として、石鹼についての描写が挙げられる。石鹼についての描写には作品解釈の観点からも検討の必要があると思われる。まずは定稿を掲げる。

ライオンを出てからは唐物屋で石鹼を買った。ちぐはぐな氣持はまた何時の間にか自分に帰って来た。石鹼を買ってしまった自分は、なにか今のは変だと思ひはじめた。はつきりした買いたさを自分が感じてゐたのかどうか、自分にはどうも思ひ出せなかつた。宙を踏んでゐるやうにたよりない氣持であつた。

「ゆめうつで遣つてゐるからちや」

過失などをしたとき母からよくさう云はれた。その言葉が思ひがけず自分の今為したことなかにあると思つた。石鹼は自分にとつて途方もなく高価な石鹼であつた。自分は母のことを思つた。

定稿では「三」の冒頭にあたる部分である。作品構成から見れば、「自分」の「氣持の転換」が如何になされるかが描かれる場面ということになる。定稿に描かれた「石鹼」は、「ちぐはぐな氣持」が治まりかけた際に「自分」の氣持を乱す契機を作るものとして描かれている。では、草稿ではどうであろう。草稿中には章を区切る番号、印等は見当たらないが、二章と三章の端境にあたるライオンでの食事の描写は、構成上の位置、表現ともに定稿との大きな変化はない。草稿では、ライオンでの食事の描写を挟んで、「自分」が「石鹼」を買

った様子について記されている。以下その箇所を掲げる。

自分はある化粧品屋で（句のいゝ）石鹼を一ヶ買った。買ってしまつてからそれを「たあとで自分は「別」ほしくもないものを買つたと思つた。「吝嗇々々でおして来たのには不調」それは「恐ろしく」おそろしく高い石鹼であつた。変なことをしたと思つた。「後」「買ひ度ひ欲望を感じ」買はうといふ意志「を少しも感じてゐなかつた様な」が自分にあつた。「たとは」たといふ覚えがなかつた。「買つたといふこと」「凶い」わるい予感が自分に起つた。

少し和やかになつてゐた自分の氣持は氣持悪く冷いものに触れた。それはライオンを出てある「化粧品で買」唐物屋で買つた石鹼であつた。それは恐ろしく高い石鹼であつた。買「つてから」(ひながら) 変なことを「したと」(するぞ)と自分は思「つた。」(つてゐた)。「スー」「すー」と夢の様な氣持であつた。何気なく買ふには高「過ぎる。」価すぎる。然し自分には「買ひ度ひ」それを買「ひ度い」(はう)といふ意志を起した「そう思つてゐると(自分は)買つてゐる自分」とは「と二人の自分がある」(そんな風に思へた。)と変に没交渉であつた。わるい予感が自分を通り過ぎた。

この草稿での描写においての石鹼と「自分」の関係はどのようなものだろうか。前半部を見ると、「自分」は「石鹼」について、買う気もなかつた、欲しくもないものを買つたと思ひながら、記憶と意志が曖昧になっていることだけは自覚し、そこに「わるい予感」を感じている。さらに後半ではライオンを出た「自分」の「和やかになつてゐた」「氣持」が触れた、「氣持悪く冷いもの」、それが「石鹼」であることが書かれている。換言すれば、この高価な「石鹼」は「自分」の「氣持」を乱し、「石鹼」を買う「自分」と買わない「自分」とに分

裂させる力を持ち、悪い予感を起させるもの、ということになるのか。端的に言えば、ここでの「石鹸」は「自分」の諸々の不機嫌や、分裂、齟齬の全てを纏めあげて固めた様な、いわば「不吉な塊」として描かれている。「檸檬」における「一顆のレモン」が「総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算して来た重さ」、その様な「幸福」の結晶であったのに対して、ここでの「石鹸」はその反面であるかのような負の結晶として描かれている。

「泥濘」においては、その「石鹸」の描写に続いて、定稿においても草稿においても、「自分」を呼ぶ母の声と顔付きが、違うもの、不吉なものへと変化していく様を描いている。「石鹸」はそれらを引き出す契機としても置かれているといえよう。

しかしながら、草稿にあった「石鹸」についての描写は大幅に削除されている。その理由は何か。「泥濘」の作品構造から考えれば、「自分」の「気持の転換」が行われるか否かという問題がその中心となるのは既に見てきた通りである。しかし、「檸檬」での一顆のレモンが、その存在で「自分」の負の感情を四散させる力を持ち得たのに対し、「泥濘」での「石鹸」は、「自分」の「気持の転換」、負の感情を昇華するだけの力を持ち得なかつたということに尽きる。「不吉な塊」自体として描かれる「石鹸」が「わるい予感」を変えることは出来ないのである。「檸檬」と「泥濘」は、作中の「自分」の気分の様相という観点から見れば、やはり同系統の作品構造として位置づけられよう。その点から見ると、「自分」が、自分に対して「奎吉！」と繰り返す行為、また草稿に見られる、

「奎助！奎助！」「自分は自」「低く抑へた声で自分は自分」  
「奎助！奎助！」

と「自分」の名を呼ぶ行為も、「瀬山の話」で自分の名を呼びかける姿と重なる。作者梶井の表現という観点からすれば、自我の救済、「気分の転換」を表現するために、現在の自分が表現しうる描写と方法を最大限使い切ろうとしているが、上手く機能しないといったところであるのか。この部分、特に段を違えて名を呼ぶという記述は削除されている。

最終的に結末部分において、「自分」の「影」の凝視と、その分裂、ドッペルゲンゲル的エピソードによって、「自分はしみじみした自分に帰つてみた。」と結ばれる。特に月に照らされる影と、街灯に照らされる影を見ながら、月が照らす影のみに「親しみ」を覚えている「自分」と、その後の凝視の後の分裂は、「自己を救済し純粋化してくれる特別な行為」として解釈されている。<sup>(13)</sup>この表現は、「泥濘」、ひいては梶井の作品群を、私小説性の枠に収まらない、独自の表現を具えたものとして評価する論拠となっている箇所であるとも言える。草稿でも、この部分はほぼ訂正されずに一気呵成に書かれている印象を与える。

しかし、大正十四年五月六日の日記にまで遡ってみれば、月と影のモチーフが見て取れる。

月段々大きくなる、昼間の青みをまだ思せる様「に」へな空にひとり転つてゐる。

夜、机を窓ぎわに寄せて窓を開き藤村の春を待ちつゝを読む、窓から眺め

る景色。《中略》サツと電燈を消すと、代りに、月が、にはかに、照明しはじめた様に 月光射しこむ、  
 コーヒ差し、コーヒ茶碗、などに月のイメージがうつり、影が机の上におちる。金属盃（盆）のぐるりのイボイボの一つ一つの光ること、銀製のロココの皿の様、一切が月光的に美化され、電燈を消す前後、こんなにもちがふ世界が出来るものかと思ふ。《中略》・妄想にあらず、自分の浸っている周囲、本を読み、本から出る、電燈を点け電燈を消す、この変化実に面白し。

ここに見られる「一切が月光的に美化され」、「こんなにもちがふ世界が出来るものかと思ふ。」というモチーフ、特に「ちがふ世界」の中に、月光に照らされる「自分」を据えてみれば、「泥濘」の結末部への道が開かれているように思われる。しかもこの日記は、「不愉快」の語が頻出する時期に書かれたものの中にあつて、「実に面白し」との記述を残している。「泥濘」での「気持の転換」をもたらず行為として、梶井の念頭にあがつても不思議はない。

しかし、結局のところ「気持の転換」はなされたのであろうか。吉岡真緒氏は桐山金吾氏の「梶井基次郎論」（『國學院雑誌』昭和五十五年十二月）を踏まえながら、「その後」に続く物語最終行「自分は自分の下宿の方へ暗い路を入つていつた」は、あまりに暗さを強調しているのではないだろうか。」と指摘している。<sup>14)</sup>

吉岡氏はまた、テキストでの「自分」の存在理由こそが書くことであり、「書くことそれ自体が読者に呼びかける営為である以上、この「自分」はつねに他者に向かつて開かれ、読まれることで無限に生きる「自分」であるのだ。」と述べ、「こうした「自分」のあり様が「泥

濘」という題名から乖離していることは示唆的である。」としている。  
 しかし、考察した梶井のテキストにおいて「気持の転換」が行われたと自己規定した中での語句、特に「しみじみした」という言葉に類するような言葉が使われたとき、そこに果たして「気持の転換」は起きていたのだろうか。五月二十二日と二十三日の日記に見られる「清々しくなった」と「晴々した気持ち」の裏にある梶井の拘泥は、遂にそれを否定しているのではなかっただろうか。一步譲つて「転換」がなされたとしても、それが「転換」である限り、皮相を流れるものではないだろうか。「自分」の「不愉快」が解決するわけではないのである。その意味で「泥濘」はその名の示す通り、「自分」を「気持」の動かないぬかるみに留めているものであるのかもしれない。<sup>15)</sup>

### おわりに

本論では「泥濘」の前IIテキストにあたる、書簡や日記から「自分」の「気持」を中心に、「泥濘」本文を読み返す、という試みを行った。結果として、題材として取られた街中での出来事は、その時の梶井の実体験そのままではなく、主人公の「自分」の「気持」についてのかなり細かい様相はまた別の時期に生じた可能性を、梶井の実体験とされるテキストから読んでいくことができただろうと思われる。

私小説性、あるいは資質論の観点からいえば、梶井その人から作品を読むということは、議論の後退となるかもしれない。しかし、「泥濘」の成立において、書き手が選択したもの、選択しなかったものの峻別と、そこからの読解という試みには、新たな解釈への可能性があ

るように思われる。

また「檸檬」との比較の上で見た場合、特に「自分」の精神の移ろいを中心にその構造を考えた場合、「檸檬」では、そのきつかけとなる要素、一顆のレモン、を十分に生かしたのに対し、「泥濘」では、その要素となる可能性をもって表現しようとした「石鹸」を十分に機能させることが出来なかったということになるか。「気分」の転換をなんとか描き出そうと、書き手が次々にその為の方法を試行している事がうかがえた。

「泥濘」ひいては梶井の初期における「自分」の「気分」、「気持」「不愉快」といったモチーフは志賀直哉からの影響を多く指摘されている。確かに「泥濘」や「檸檬」で描かれた「自分」という語り手兼主人公の「気持」、あるいは自意識を中心として物語を進めるという構造は志賀の作品の大きな特徴であり、両者の共通点といえよう。

だが志賀作品における、いわゆる《調和》、自意識の安定というものは、他者との関係性の中で好転に向かい、その関係性によって保障されているものではないだろうか。例えば、梶井の日記、大正十四年五月六日にその名が見られる志賀の「廿代一面」(大正十二年一月)は、やはり「不機嫌」を蔵する主人公半田英介が登場する作品であるが、登場人物は彼の家族、友人等、十人を優に超えており、主人公は自分と同じような神経衰弱気味の友人である仁木や伊作との交流の中で、自身の不機嫌な気分を消化していくのである。

しかし、梶井の「檸檬」や「泥濘」では、そのような調和、自意識の安定を、やはり志向しつつも、それを保障する他者が出現しない。よって他者との関係性の中から生じる志賀的な調和は、原則としては

梶井の中に生じないことになる。しかしながら、なお志賀作品のよいうな《調和》を求め、「不愉快」を関係性の中に消化しようとすれば、「檸檬」のような依代としてのモノ、レモンを物神化するか、あるいは「泥濘」にあるように、仮想としての他者となるもう一人の自分を自身の中に生じさせるしかなくなるだろう。「檸檬」と「泥濘」の両作品は、志賀的な「気分」を軸としながらも、他者との関係性が捨象されている点で大きく異なっている。

さらに「泥濘」の私小説性と、書かれなかったもの、という点から考えれば、その時期の「不愉快」の最大の源であった「青空」同人との軋轢、日記に記されたような出来事について、具体的にほとんど描かず、「自分」の「気持」への視線、自己対自己の関係性の劇の中にそれを消化しようとした点において、「泥濘」の非私小説性を指摘できるだろう。また、作品をいわゆるゴシップに墮さなかった梶井の矜持(あるいは羞恥)といったものを見出せるのではないかと思われる。結果的に本論は、「泥濘」が梶井作品において「創出するエレメント」としての位相を確実に占めている(前掲桐山氏)ことを補強する形となったように思われる。しかし、そのエレメントたる「泥濘」は、作者梶井の資質から自然と湧出したものではなく、《書くこと》の劇の苦闘から生み出されたものだと思われるのである。

※テキストは『梶井基次郎全集』第一巻(第四卷(一九九九年)二〇〇〇年筑摩書房)を使用した。引用中の旧字は適宜新字に改めた。また傍線は論者による。

注 (1) 飛高隆夫「梶井基次郎のためのノート」(一九六九年三月『大妻女子文学文学部紀要』)。また、岡本恵徳「特集・梶井基次郎を読む『泥濘』」(一九九九年六月『解釈と鑑賞』)が前掲飛高氏の論を踏まえ、「泥濘」について「一種の転換期に属する作品と読めてくるのは避けがたい」としている。

(2) 渥見秀夫「泥濘」「路上」「椽の花」―梶井基次郎作品世界の底流―

(一九九八年二月『愛媛大学教育学部紀要(人文・社会)』)

(3) 岡本恵徳「特集・梶井基次郎を読む『泥濘』」(一九九九年六月『解釈と鑑賞』)

(4) 山崎正純「小説の小説」(一九九七年五月『時代別日本文学史事典現代編』)

(5) 桐山金吾「梶井基次郎論―『泥濘』の成立とその位相―」(一九八〇年十二月『国学院雑誌』)

(6) 同(5)

(7) 濱川勝彦「梶井基次郎における『影』と『二重身』」(一九九二年四月『皇学館論叢』)

(8) 西尾玲「梶井基次郎『泥濘』―私小説と『視る』こと―」(一九九八年三月『語文論叢』)

(9) 熊木哲「梶井基次郎『泥濘』覚書」(一九八七年七月『九州大谷国文』)

(10) 同(2)

(11) 松澤和宏『生成論の探求』(二〇〇三年六月初版、名古屋大学出版会)

(12) 同(9)

(13) 引用は、同(8)西尾氏のものであるが、解釈としては、最後「自分」の「気持の転換」が行われたという読みが定説となっている。

(14) 吉岡真緒「梶井基次郎『泥濘』論―『ある』ことへのあたり―」(二〇〇三年三月『日本文学論究』)

(15) 遠藤祐氏は『檸檬』より『冬の日』まで、梶井基次郎における内心の展開の一面・(一九五六年三月『成城文芸』、引用は『日本文学研究叢書 梶井基次郎・中島敦』(一九七八年、有精堂)によった。)において「泥濘」の結末部、いわゆるドッペルゲンゲルの描写に言及し、「動き出すことを禁ぜられた沼のやうに淀んだところをどうしても出切つてしまふことが出来ない」でいる自分を見捨てて、願望だけが

ひとり影のうちに宿って何処かへ歩み去る、この自我の分裂状態は彼にとつて興味あるテーマとなったに相違ない」としているが、その分裂の中に「気持の転換」、カタルシスがあるとはしていない。

(にのみや ともゆき、広島大学大学院博士課程後期在学)